

# 資本主義的生産の理論

— マニュファクチュアと機械制大工業 —

お ば た み ち あ き  
小幡 道昭

2001 年 3 月 23 日

## 目 次

1	剰余価値論と生産様式論	3
1.1	剰余価値論の死角	3
1.2	生産様式論の空洞化	5
1.3	蓄積論の基底	6
2	「機械と大工業」の論理構成	8
2.1	機械そのものと技能	8
2.2	自動化工場とその帰結	11
2.3	大工業と資本主義的生産様式	13
3	資本主義的生産の基本構造	16
3.1	技能の置換と分解	16
3.2	生産の自動化と労働の規格化	19
3.3	二重の生産様式	21

## はじめに

市場を通じ価値増殖を追求する資本が生産過程を増殖基盤に取りこむ場合、それに最適な生産様式というものがあるのか、あるいはそれにはいくつかの型が考えられるのか、資本主義的生産は単一の純粋像を有するとみるべきか、本稿の目的はこのような問題を、理論的な視角から考察することにある。これは、歴史的な観点から捉え返せば、たとえばイギリス自由主義段階における綿工業に代表される生産体制が資本主義にもっとも適していたのであり、その後発展した鉄鋼業や化学工業のような大規模な装置産業や、自動車や電気機器のような複雑な部品加工・組立型産業は、もはや資本主義的生産には不向きな性質のものであったのか、それともこうした新たな産業の登場は生産様式と市場機構とを変化させつつ、資本主義の多様な発展を惹起する契機であるとみるべきか、こうした問題になるであろう。さらにこの問題は、今日、資本の活動が物的生産の領域から、医療や教育、保育や介護など、社会生活のさまざまな領域にまで広く深く浸透しつつあるなかで、市場による社会編成の可能性をどう再解釈すべきかという現代的課題に発展する。

このような問題に、従来マルクス経済学はどの答えてきたのであろうか。すぐに念頭に浮かぶのは『資本論』第1巻第13章「機械と大工業」であり、資本主義的生産とはそこに示された「機械

制大工業」<sup>1</sup>に他ならない、といった解答が即座にかえってきそうである。これは、資本主義は当然、それに対応する一つの「生産様式」を有するという通念にも附合する。たしかに、「機械制大工業」なるものがマルクスの時代の特定の産業の生産方式ないしは労働編制に限定されるのであれば、それは一つの典型をもつということができよう。しかし、その後発展した重化学工業や加工組立型産業における独自の生産方式や労働編制は、はたして「機械制大工業」からの逸脱を意味するものかどうか、自動化とか大規模化とかいった観点からすれば、それらは『資本論』の「機械と大工業」で示唆されたすがたを、むしろいっそう徹底したかたちで現実化した観さえなくはない。そのかぎりでは、もともと市場に起源をもつ資本にとって、生産の内部編成は外的条件に過ぎず、そこには多様な型を許容する余地があるようにも考えられる。さらに押し進めてゆけば、『資本論』で「機械制大工業」に対置されるマニュファクチュアも、資本主義の発生過程に現れた不完全な生産方式ないし労働編制として片づけてしまってもよいかどうか、この点も疑問となってくる。資本主義はそれに適合的な単一の「生産様式」をもつという通念は、あらためて問い返してみると、その背後に幾層か複雑な問題を抱えているように思われる。資本主義的生産の理論的考察が求められる所以である。

本稿ではまず第1節で、『資本論』とりわけその第1巻体系のなかで第13章が占める理論的位置を検討し、資本主義的生産の内部編制がこれまで本格的な理論研究の対象とされてこなかった背景を探ってみる。そのうえで実はこの章が、第1巻の後半で提示されたマルクスの自己崩壊的な資本主義像を決定する、無視しえぬ潜在力を有している点を明らかにする。本稿の考察対象は、価値論、蓄積論、信用論、地代論などに比べて一般に概念構成や理論化の方法がはるかに未整備であり、何をどのように考察すべきか、このような最低限の確認と準備作業が不可欠な条件となる。これをふまえて第2節では、「機械と大工業」に理論的メスを入れ、それを支える概念的骨格を洗いだす。その基本は、機械を労働者の技能を全面的に置き換えるものと捉える置換説であり、自動化工場の全面的支配のもとで労働の排除が一方向的に進むという主張にあるが、しかしそれと同時に、多層的な生産様式を資本主義的生産のうちに認める観点が潜んでいることを明らかにしてゆく。この技能置換説的な機械の把握に対して、第3節では、技能のうちから単純な要素が分離され、それが機械化されるとみる周辺分解説的な機械の理解を提示し、自動化が必ずしも労働者を排除することにはならない理論的根拠を明らかにする。生産の自動化は同時に労働の技能の深化を伴う面があり、その過程で労働者の技能は等級制と実質的標準化という相反する極性を帯びざるをえないという本稿の基本認識は、収斂説的な資本主義観や単一の純粹資本主義像を批判的に捉えかえす基礎となる。

機械制大工業なるものの概念について検討を試みる。機械制大工業なる用語は、実はさまざまな条件、想定の不明確な集合に添付されたラベルにすぎない面があり、明確に規定された諸契機を関連づけて構成された概念として確立されているわけではない。ここでは第13章の内部に立ち入って検討を加え、そこに示唆された概念化の視角と方法を摘出し、いくつかの機械制大工業の像を浮かびあがらせることにする。そして第3節で、マニュファクチュアという生産様式の可能性も含め、あらためて資本主義的生産様式とはどのように規定されるべきなのか、資本主義的生産様式の二重性というかたちで、冒頭に提起した問題に対する試論を述べてみたい。

# 1 剰余価値論と生産様式論

## 1.1 剰余価値論の死角

マルクス経済学の原理論研究において第13章「機械と大工業」は、これまで直視されることの稀な空白領域であった。第1巻に占める分量も多く、内容もそれなりに充実し一通り整理されているにも関わらず、理論上は括弧に入れられてきたのにはそれなりの理由がある。まず考えられるのは、『資本論』、とくにその第1巻の論理の大きな流れにをふり返ってみると、この章がいつのまにか、価値論、剰余価値論の死角に廻ってしまう点である。

周知のように、『資本論』はまず商品の分析からはじまり、商品の使用価値と区別される価値に関して、二商品間の交換比率のうちに現れる第三の共通物、すなわち価値の「実体」が人間労働のもつ同質性、マルクスの「抽象的人間的労働」であると規定すると同時に、この「価値の大きさ」はその商品の生産に「社会的に必要な労働時間」によってきまると論定する。この出発点の価値規定は、投下労働時間に比例して商品が交換されるという、いわゆる「労働価値説」を独自に論証しようとしたものというよりも、リカードを中心に主張された古典派経済学の想定を厳密に再定式化したものように解せるが、その点とはもかく、この基礎のうえに、『資本論』第1巻前半の核心たる剰余価値論は構築されるのである。

その基本問題は、資本の利潤は等価交換の原理を蹂躪することに由来するのか、厳密に言えば、その社会的基礎となる剰余価値は、等価物どうしの交換という「商品交換の法則」を侵すことによってはじめて発生するのか、という点にある。この問題に対してマルクスは、剰余価値の形成は、「労働価値説」が労働力商品にも貫徹する結果であり、資本による労働者の搾取は、市場の原理を侵犯するものどころか、むしろ全面的な等価交換の結果なのだと答えることになる。ここには、たとえば「労働貨幣」などにより、直接生産者間に労働時間に応じた交換比率が確保されれば、そうした本来の市場を通じて社会的平等と公正は保証されるのであり、資本の利潤追求はこの市場原理を侵犯するものだと主張する当時の市場社会主義者に対する痛烈な批判がこめられているといつてよい。

ここで考えてみたいのは、このような剰余価値論の展開のなかで資本主義的な生産方式や労働編制のあり方は理論上どのような意味をもつことになるのか、この点である。まず第1に注目すべきは、マルクスの剰余価値論の核心をなす第4章「貨幣の資本への転化」から第5章「労働過程と価値増殖過程」の展開における「労働過程」の扱いであろう。マルクスは、貨幣の実在する市場では、自己の商品を売ってえた貨幣で目的の商品を購入する  $W - G - W'$  という商品流通とならんで、より多くの貨幣を目的に商品を買って売る  $G - W - G'$  という運動が発生するとし、この運動を第4章で「資本の一般的定式」と規定する。これは等価交換の原理と一見矛盾するようにみえるが、労働力が商品として登場すればこの矛盾は解決するという。ここでマルクスはまず、労働力商品の価値が、一般商品と同様、その生産に必要な労働時間によって、すなわち生活資料の生産に必要な労働時間によって与えられる点を確認する。ついで、労働力商品の使用価値たる労働そのものに関して、「労働過程」のなかで考察を加えたのち、「価値増殖過程」において、資本が購入した労働力を実際に何時間の労働として使用されるかは、必要労働時間とは独立の大きさのものであるとことを指摘し、この必要労働時間をこえる労働日の延長のうちに剰余価値の基礎が与えられるというのである。

ここで留意すべきは、「労働過程」がきわめて抽象的なかたちで取り上げられている点である。たしかにそれは人間労働に対する鋭利な洞察を基礎に、およそどのような時代にも通じる基本的な原則を捉えている点できわめて重要な意味をもつ。そしてまた、そこにあらゆる社会に共通する経

済原則を読みとり、これによって「労働価値説」が新たな観点から基礎づけられうる点でも無視できない。ただこの商品価値の基礎づけ自体は、それと同時に、剰余価値の形成を説明するものではない点は銘記すべきある。「貨幣の資本への転化」を起点とする以上のような展開をふまえて、では、剰余価値の根本は、市場における取引の原理にあるのか、生産方式や労働編成にあるのか、とここで突き詰めて問いかえせば、けっきょくそれは前者だという結論になる。そもそも複数の主体を想定した労働編成など、この「労働過程」の抽象水準でははじめから論じようもない問題となる。第4章から第5章の範囲では、必要労働時間をこえる労働日の延長は、労働力商品の価値と使用価値との区別といった、いわば市場の観点から説明されているのであり、「労働過程」の抽象的・一般的な規定は、この点に関するかぎり、剰余価値の形成がむしろ特定の生産方式や労働編成に直接関係なく把握できることを逆に示唆することになっている。抽象化された労働主体が想定された「労働過程」では、資本はもともと「労働の形式的包摂」<sup>2</sup>を本質としており、さまざまな生産方式や労働編成に付着しそれを増殖の基礎に取りこむことができる形態であり、剰余価値取得の第一原理は、労働力の売買に潜む商品経済的な「権利対権利」<sup>3</sup>に求められるのである。

第2に「相対的剰余価値の生産」に対する「絶対的剰余価値の生産」の理論上の優越性の問題がある。『資本論』の構成では、剰余価値の総論がまず展開され、このもとに「絶対的剰余価値の生産」と「相対的剰余価値の生産」が各論として併記されているのではない。「労働過程と価値増殖過程」ではじまる「絶対的剰余価値の生産」が剰余価値の一般規定をとなっているのである。剰余価値はつねに必要な労働時間をこえて労働日が延長されているという事実由来する以上、須く絶対的剰余価値の生産という性格をもつ。ここにはA. スミスが富の増進を一國の生産力の上昇に求め、リカードが土地生産物に関する収穫の逡減が利潤率の低落に繋がることとしたように、生産力的な視点から剰余を捉える古典派経済学の枠組みに、その本質を純生産物の階級的分割、市場原理に裏打ちされた資本家の労働者に対する強制という枠組みを対置せんとしたマルクスの意図を読みとることは容易である。生産力の上昇一般は、生活物資の増大や労働日の短縮に繋がる可能性もあり、その高低がそのまま剰余価値率の高低を決めるわけではない点は、第14章「絶対的および相対的剰余価値」で「自然の恵み」<sup>4</sup>に論及しつつ強調されているところでもある。歴史的諸社会を振り返ってみると、生産力の上昇は必ずしも剰余生産物を生みだしたわけではないが、労働日に対する社会的強制、純生産物に対する階級的支配は、つねに剰余生産物の形成に帰結する、「絶対的剰余価値の生産」の理論的優位の背景にはこうした認識が潜んでいる。

したがってこうした基本構成のもとでは、抽象化され個体化された「労働過程」に対して、後にその内部編成があらためて説かれても、それは資本の価値増殖の根拠を説く剰余価値論の基本線から、かなり距離が生じることになる。たしかに第4篇「相対的剰余価値の生産」では第11章「協業」、第12章「分業とマニファクチュア」をふまえて、とりわけ第13章「機械と大工業」において、資本主義に特有な生産方式や労働編成に綿密な説明が施されるのであるが、それは価値論・剰余価値論の流れからすれば、生産力の上昇により生活物資の価値を低下させ、必要労働時間の短縮を通じ、与えられた労働日のもとで剰余価値の増進を可能にするという、第10章「相対的剰余価値の概念」の歴史的例解としてしか現れてこない。こうして『資本論』の前半体系の核心をなす剰余価値論の観点からみれば、第1に剰余価値の基本規定は生産方式や労働編成からひとまず独立に展開可能であり、第2にこの実際の考察はその各論のそのまた例解としての意味しかないというかたちで、理論の死角に隠れてしまうことがわかるのである。

## 1.2 生産様式論の空洞化

これまで、本来「生産様式」と記せばよいところで、生産方式や労働編成といった回りくどい表現が用いられているのにはあるいは気づかれなかったかもしれない。ここにもまた、「機械と大工業」が理論研究のなかで陰の存在となってきた原因が潜んでいる。その対象を理論展開のなかでどう抽象化し概念的に捉えるか、その枠組みに実ははっきりしないものが残されているのである。このことが、その当時の実例をふんだんに盛り込んだ具体的な記述と相まって、一般的な理論的考察の途を封じてきた可能性は高い。たとえば、「資本主義的生産様式」とは「機械制大工業」のことが、このような設問はその内容の正否を問う以前に、たちまち概念次元で混迷に逢着する。

「生産様式」という概念は、よく知られているように、マルクスが唯物史観を確立してゆく初期の段階から、すでに重要な役割を負わされてきた。『経済学批判』「序文」における、よく知られた唯物史観の定式では、一定の「生産力」の水準とこれに対応した「生産関係」を総括するものとして「生産様式」という概念が提示され、これが歴史的な諸社会の土台となり、この基礎のうえに法律的ならびに政治的な上部構造が形成されると論じられている。そしてこうした観点から人類史の前史が、アジア的、古典的、封建的、そして近代ブルジョア的生産様式という順で発展してきたと総括されることになる。この「近代ブルジョア的生産様式」は、『資本論』で一般に用いられる「資本主義的生産様式」にほぼ匹敵するものであろう。その意味で「資本主義的生産様式」という概念は、この場合、資本主義社会における経済過程全般を指すものといってよい。

事実『資本論』の索引などをたどれば明らかのように、「資本主義的生産様式」という表現は多くの場合、資本によって社会的再生産が組織される社会を広く意味するものとして用いられている。したがって、「資本主義的生産様式」という場合には、「生産様式」とはいいながら、その基軸は市場による社会的分業の編成に移ってしまっていることに注意すべきなのである。逆えばこの場合の「生産様式」は、市場と対をなす非市場的な生産方式や労働編成の特徴を含意するものではなく、なくなっているわけである。剰余価値論を中核とした市場の視点にたつ資本主義の把握が、生産方式や労働編成の特定のあり方を死角に落とす傾向をもっているとする、初期の唯物史観以来の歴史社会認識の根底におかれてきた「生産様式」という概念もまた、「資本主義的生産様式」という規定とともに、事実上生産本来の内実を失い空洞化されているのである。

もちろん、これはあくまで概念上の空洞化であり、資本主義経済における生産過程の内部編成の問題そのものが『資本論』で考察されていないということではない。たとえば第12章では、市場による社会的分業の深化が作業場内分業と同列に捉えうるものではない点が強調され、そのもとで「資本主義的生産様式の社会においては、社会的分業の無政府性とマニファクチュア的分業の専制とは相互に制約し合っている」<sup>5</sup> というように、市場とは本質的に異なる労働編成の特徴が「無政府性」の対極をなす「専制」をもって約言されている。しかしここでも「資本主義的生産様式」という概念は、資本主義経済一般を指すものとして用いられ、この「生産様式」における生産は、市場と対をなす固有の「生産様式」を意味するわけではない。たしかにマルクスもたとえば第13章の冒頭では、「生産様式の変革は、マニファクチュアでは労働力を出発点とし、大工業では労働手段を出発点とする」<sup>6</sup> というように、「生産様式」という用語にマニファクチュアや大工業の内部編成を含意させる場合がないわけではない。本稿では以下混乱のおそれがないかぎり、この狭義の意味で「生産様式」という用語に括弧をつけずに適宜使用してゆくが、少なくとも『資本論』に関するかぎり、生産方式や労働編成に関する重要な考察が繰り返さなされいながら、その考察対象に統一的な用語を与え、それを明確な概念に組みあげようとする指向はなぜか弱いのである。

マルクスは第13章にはいると資本による生産過程の内部編成を指すために、しばしば「機械経営」という用語を使用し、これを「マニファクチュア経営」と対置し、あるいは「社会的経営様

式」<sup>7</sup> という表現で概括するようになる。しかし、この「経営」という概念も個別的企業の内部とといった意味合いであり、それ以上に明確な規定を与えられているとは言い難い。マニユファクチュアも機械制大工業もともに、生産技術の変化を基礎に労働者の組織化のあり方を取り扱っているという点では、「労働様式」<sup>8</sup> という用語のほうが考察対象の概念化に資するのではないかと思うが、いずれにせよ、こうした抽象化の契機を厳密に確定する姿勢はほとんどみられない。それは、マルクスが『資本論』劈頭で哲学的にかなり凝った意匠で構築した商品の価値概念と好対照をなす。むしろ、商品の二要因の分析にはじまるような一貫した体系的展開が、あらゆる考察対象に一律に適用可能かどうか、またどの理論領域でも必要かどうか、それはわからないが、しかし少なくとも『資本論』の展開におけるこの抽象度の落差に、マルクス経済学の理論研究のなかで、第13章が正面から論じられずにきた原因の一端が潜むように思われる。

### 1.3 蓄積論の基底

しかし、『資本論』第1巻全体を通観してみると、この第13章は理論構成上、単なる例解、とるに足らぬ附論として片づけるわけにはゆかないことが明らかになる。第13章の内部に一步立ち入ってみると、それが「相対的剰余価値の概念」の例解から逸脱していることはだれでもすぐ気づく。この章で論じられている具体的な事例のなかには、生産力の上昇が生活物資の価値下落とそれに起因した賃金低下による剰余価値率の上昇という「相対的剰余価値の概念」の例解に相当するものはほとんど見あたらない。次節で詳しくみるように、そこで中心となっているのは、機械装置の導入が引きおこす労働日の延長や労働の強化であり（本稿10頁）、さらには第4章第3節「労働力の購買と販売」における労働力の価値規定の見直しにまで及ぶ、いわゆる家族内の賃金分割などであり（本稿10頁）、事実上、剰余価値論の根幹をなす第4章から第5章の展開に遡った内容になっているといわざるえない。労働者からの搾取という以上やはりそれは、労働力商品の売買契約といった市場的権利関係に解消されるようなものではなく、労働を組織しその集合力を利用する資本が、集合に由来する抵抗労働の場でいかに打ち砕くのか、この実質的矛盾に踏み込まざるをえないことを吐露しているように読めるのである。

最後の点はともかく、こうして第1巻体系全体を視野に収めて「相対的剰余価値の生産」の例解と目される第11章から第13章までの3つの章を鳥瞰してみると、この部分から展開の基調が大きく転換していることがわかる。すでに別稿で指摘したことであるが、<sup>9</sup> 資本主義的生産であるかぎり求められる最低限の必要条件とは何か、この問題にマルクスはどう答えたことになるのか、あらためて考えてみると、実はそれは第11章で規定された協業であることに想到する。むしろいわゆる単純協業がそのまま、資本主義的生産において支配的となるというのではない。現実には分業に基づく協業として発現するのであるが、しかしその本質は組織的労働の創出としての協業にあり、分業一般にあるのではないとマルクスは主張するのである。ここにはアダム・スミスの『諸国民の富』が分業を生産力上昇の基礎として、その体系の出発点に据えたことへの根本的な批判が込められている。スミスの場合は、たとえば本稿5頁の引用に示されるような、社会的分業と作業場内分業との対極性を明確にすることなく、むしろ分業の深化と市場の拡大とが表裏の関係におかれる。したがって、既存の一連の生産過程が細分化され、その間に中間市場がつぎつぎに派生するような場合にも、分業による生産力の上昇は認められる。すなわち、市場を介して社会的分業を編成する、独立した小生産者の生産方式をも発展の一つの可能性として許容するかたちになっているのである。

マルクスが協業を資本主義的生産の根底に据えた真のねらいはおそらく、当時の市場社会主義者や無政府主義者が暗に指向していた、このような可能性への根本的批判であった。マニユファク

チュアにせよ、機械制大工業にせよ、いずれも資本主義的生産として協業を基礎としており、そこに独立の手工業者の分業体制との間の根本的な区別がある。その点でまったく同じ手工業的技術を共有していても、独立生産者の生産方式とマニュファクチュアとは決定的に異なるものとされている。資本は個々の労働者を個別的に労働させるのではなく、それらの労働力を独自に編成しそ集合力を吾がものとする。資本は市場でただ価値どおりに労働力を買い、そのままばらばらに労働させるというのではなく、実は独自に編成することによって、それ以前の社会とは決定的に異なる資本主義経済に固有な生産力基盤が新たに確保されるわけである。

このように捉え返すと、資本主義的生産の基礎としての協業が、実は蓄積論の集中・集積論と表裏の関係にあることがわかる。『資本論』第1巻の後半体系は、こうした資本主義的生産に独自の性格を主題として展開されているといつてよい。第1巻を締めくくる位置におかれた第7篇「資本の蓄積過程」は、単に剰余価値の蓄積を説くだけではなく、同時にその過程で中小資本が淘汰され、諸資本の規模が増大する関係をつねに問題としている。社会全体の資本量と労働人口との関係がただ量的に問題とされるだけではなく、資本主義的生産の基礎となる大規模生産が生成されてゆく構造変化に焦点があてられる。しかもこの構造変化は、2.2(本稿12頁)でみるように、資本主義的生産がマニュファクチュアにかわって全面的に機械制大工業によって制圧されてゆく過程をその実質としているのである。

周知のようにこの「資本の蓄積過程」の結論は明確である。個々の資本の生産規模の増大は、生産手段に対する労働力の割合を減じてゆき、生産力の上昇とともに雇用の量を絶対的に収縮するという逆説が生じるというのである。労働者からの搾取だけではなく、同時に「この集中、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と相ならんで、ますます増大する規模での労働過程の協業的形態、科学の意識的な技術的応用」<sup>10</sup>などが進むとされ、ここから「資本主義的私的所有の甲鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」<sup>11</sup>という結論が導かれる。これは資本主義もまた内在的な法則によって否定される運命にあるという、マルクスの資本主義像の核心であり、マルクス以降の「マルクス主義」は、この資本主義の自己崩壊論を多かれ少なかれ母班として帯びてきたのである。

こうしてみると、「相対的剰余価値の生産」という剰余価値論の外皮のもとで論じられてはいるものの、第13章「機械と大工業」が実は『資本論』第1巻で提示された資本主義像を根底で支える礎石の役割を担っていることがわかる。したがって、もしこの自己崩壊論的な資本主義像を根本から問いなおそうとすれば、それは畢竟第13章にまで遡らざるをえない。「機械制大工業」の内実を問うことなしに、マルクスの資本主義像を倒立させることは困難なのである。純粋な資本主義を理論的に想定すれば、それは恐慌を伴う景気循環を媒介にしてではあるが、自己崩壊するのではなく逆に自律的に発展するという立場もたしかに一つの可能性として考えることはできる。ただその場合も、自立的な資本主義の原理像を構築するのであれば、それはいかなる生産様式を前提とするのか、あるいは特定の生産様式とは独立に説明できるものなのか、こうした点が明確にされなくてはならない。この純粋な資本主義の想定と固有の生産様式との関連については別の機械にさらに考えることにして、これまで空白領域とされてきた「機械と大工業」の理論的検討は、マルクスの資本主義像の再考にまで及ばざるをえないことは確認できたと思う。こうした射程のもとに、第13章の内部に踏みこみ、その理論的骨格を明らかにしてみよう。

## 2 「機械と大工業」の論理構成

### 2.1 機械そのものと技能

第13章は『資本論』全3巻中最長の章として知られているが、その内容は大きく3つの部分に括ることができる。この章はまず、機械の特性とそれが労働内容及び労働者に及ぼす直接的影響を論じた第1節から第3節までの第I部で始まり、第4節冒頭にはこの第I部の要約がおかれている。ついで自動化された工場に焦点をあて、機械経営が労働者階級に及ぼす社会的影響を考察した第4節から第7節にわたる第II部が展開される。最後に機械経営がマニュファクチュアやその他の生産様式に及ぼす影響を分析した第III部で締めくくられるかたちになっている。むしろこれらの部分は明確に区切られているわけではなく、実際の内容は複雑に入り組んでいるが、ここでは以上のような3部構成を一応の目安として第13章の論理構成を明らかにしておく。

マルクスは第12章の終わりの部分で、マニュファクチュア的分業がその発達を通じて機械を生み出すと述べ、つづく第13章でこの機械そのものの分析に移る。その冒頭で、資本主義的な機械の利用は労働の軽減のためなどではなく、あくまで剰余価値の増進を目的とするものであると一言断った後、ただちに価値論的な枠組みから機械そのものの分析へと視点を転ずるのである。しかし、このようなかたちで開始される機械そのものの分析は、生産技術論的な色彩が強く当時の産業事情を反映したものとなっており、一見したところ一般性を欠いた論述となっている。実際また、その後の技術革新と産業構造の転換は、この第13章をもはや歴史的な叙述として読むよう迫っている。しかし、〈なにを分析するか〉ではなく〈どのように分析するか〉という観点にたち、その分析対象から分析方法を区別して捉え返すと、そこには現代においても無視できぬ重要な理論問題が浮かびあがってくる。

その核心を一言でいうとすれば、機械装置と労働者の技能ないし熟練の関係ということになる。この場合、熟練労働者、不熟練労働者という規定もあり、skillの訳語としては熟練というほうが通りがよいかもしいが、ただここで対象としているのは、一生涯追求しうるような上達に限度がない職人芸的な熟練ではなく、外形的な標準による格付けでき検定の可能な、その職種に携わるのに最低限の能力であるという意味で、以下では技能という表現のほうを使ってゆくことにする。即物的な機械そのものの分析も、この意味での技能の考察方法を示す点で重要な意味をもつ。マルクスは機械とは何かという問いに対して、「本来的な道具が人間から一つの機構に移されたとき、単なる道具に代わって機械が現れる」<sup>12</sup>と答え、周知のように機械を原動機、伝導機、道具機に分類している。むしろこのような分類自体には繰り返し述べたように当然時代的な制約があるが、重要なのは、最後の道具機のうちに当時の技能の問題が集中している点を見てとることである。マルクスはここで、「単なる原動力としての人間と本来の意味での操縦者である労働者としての人間との間の区別」<sup>13</sup>を強調するのであるが、これは「労働過程」の分析において人間労働の特徴をまず目的を設定しそれを意識的に追求する、合目的的活動と捉えたことに通底する。機械装置を中心とする生産方式のなかで、目的意識的な活動に不可欠な労働主体の技能が、どのような変容を被ることになるのか、この点こそ道具機に焦点を絞った含意と解される。動力機の実展は「生産様式を変革しない」<sup>14</sup>という指摘は、逆にいえば、生産様式の変革は労働主体が有する技能の処理方法に係っていることを意味しよう。こうした点にさらに方法論的な抽象化を施せば、マルクスの時代にのみ妥当する単なる例解ではなく、現代の資本主義にも通じる一般的な理論問題を見いだすことができるのである。

ではこの技能の変容を、マルクスはどのように捉えていたのであろうか。第1節に関するかぎり、道具を操る労働者の技能が機械装置に丸ごと置き換えられるとみる、技能置換説が支配的であ

る、ということになる。

産業革命の出発点となる機械は、一個の道具を扱う労働者を、一つの機構と取り替えるのであるが、この機構は、多数の同一または同種の道具で同時に作業し、単一の原動力 — その形態がどうであろうと — によって動かされる。ここでわれわれは、機械を、といってもようやく機械制生産の単純な要素としての機械を、もつのである。<sup>15</sup>

ここでは「産業革命の出発点となる機械」が一对一の単純な取り替えなのに過ぎないのに対して、「機械制生産の単純な要素としての機械」では集積的置換が想定されているようにも読める。しかしこれは原動力の規模に関わる二次的区別に過ぎず、道具を扱う労働者を機構と「取り替える」という点に機械の原初規定がおかれていることに変わりはない。

ここで考えておく必要があるのは、取り替えられる労働者はどのような種類の労働者なのか、単純作業に特化した不熟練労働者なのか、あるいはマニファクチュア的等級制のもと組み込まれた熟練労働者なのか、こうした問題である。この点から読み返してみると、第13章ではなぜか、機械が熟練労働者の技能を分解し単純化するという説明がほとんどみられないことに気づく。そこから推測すれば、熟練労働者がそのまま全面的に置換されるという結論に至る。機械によって技能がまず解体されて次にその諸要素が装置に転じるというのではないのである。技能の分解は、すでに別稿でふれたように、<sup>16</sup>『資本論』の場合むしろ第12章「分業とマニファクチュア」の主題を形成しており、そこでは熟練労働者の技能の等級制の深化と併行して、不熟練労働者も発生するが、<sup>17</sup>ただそこには同時に次のような限界があるという。

本来的なマニファクチュア時代、すなわち、マニファクチュアが資本主義的生産様式の支配的形態である時代のあいだ、マニファクチュア独自の諸傾向の十分な展開は多面的な障害に突きあたる。マニファクチュアは、すでに述べたように、労働者たちの等級的編制のほかに、熟練労働者と不熟練労働者との単純な区分をつくり出すとはいえ、熟練労働者の優勢な影響力によって、不熟練労働者の数はなおきわめて限られている。マニファクチュアは、特殊諸作業を、その生きた労働諸器官のさまざまな程度の成熟、力、および発達に適合させ、それゆえ婦人および児童たちの生産的搾取に突き進むとはいえ、この傾向は、一般に慣習および男子労働者の抵抗のために挫折する。<sup>18</sup>

すなわち、不熟練労働者を生みだす潜勢力自体はマニファクチュアの分業原理にも内包されているが、それは熟練労働者の抵抗によって抑止されているというのである。ここから推察すれば、マルクスが機械によって置き換えられるというその労働とは、この「数はなおきわめて限られている」という不熟練労働者のほうではなく、それまで優勢であった熟練労働者のほうだということになる。

このことは、「結合された労働人員に圧倒的多数の児童および婦人をつけ加えることにより、機械は、マニファクチュアにおいて男子労働者が資本の専制に対抗してなお行っていた抵抗を、ついに打ちくだく」<sup>19</sup>と総括され、第2節をとばし第3節「労働者におよぼす機械経営の直接的影響」a「資本による補助労働力の取得。婦人労働および児童労働」の内容に直結する。こうしてマルクスの機械 = 技能置換説は、婦人労働および児童労働を取りこんだ補助労働の一般化と表裏の関係におかれ、その帰結は次のように論じられる。

労働力の価値は、個々の成年男子労働者の生活維持に必要な労働時間によって規定されるだけでなく、労働者家族の生活維持に必要な労働時間によっても規定された。機

械は、労働者家族の全員を労働市場に投げ込むことによって、夫の労働力の価値を彼の全家族に分割する。それゆえ機械は、を減少させる。<sup>20</sup>

この場合、「夫の労働力の価値」がはじめから「労働者家族の生活維持に必要な労働時間」によって規定されていると厳密にとるならば、夫個人の賃金率が下落したことをもって、ただちに機械が「夫の労働力の価値」を減少させたというべきかどうか、疑問は残るが、それはともかく剰余価値率自体は上昇する。しかし、これは相対的剰余価値の生産ではないし、また本来の絶対的剰余価値の生産とも異なる。家族に代表される生活集団を単位に考えれば、一定の生活物資を基礎に引き出される労働量が増大するという意味ではむしろ絶対的剰余価値の生産になっている。本来労働力の価値も、このような生活集団を基礎に生活時間の存在も考慮したうえで再規定されるべきであろうが、それはともかくここでの例解は、各個別労働者の必要労働時間を所与として労働日が延長されるという、それまで論じられてきた絶対的剰余価値の生産の基本ともかなり乖離した説明となっているのである。

この a に続く第 3 節の内容も、どういうわけか、第 13 章が属する第 4 篇「相対的剰余価値の生産」ではなく、むしろ第 3 篇「絶対的剰余価値の生産」そのものになっている。<sup>21</sup> マルクスは第 13 章第 2 節「生産物への機械の価値移転」で「機械は労働過程にはいつでも全体としてはいっていきが、価値増殖過程にはつねに一部分しかはいっていかないということである。機械は、自分が損耗によって平均的に失ってゆく価値よりも多くの価値はけってつけ加えない。だから、機械の価値と、周期的に機械から生産物に移されてゆく価値部分とのあいだには、大きな差が生ずるのである。価値形成要素としての機械と、生産物形成要素としての機械とのあいだには、大きな差が生ずる」<sup>22</sup> 点を指摘する。この結果、第 3 節 b 「労働日の延長」では、機械のいわゆる「社会的摩滅」を回避せんとする要請がはたらき、それが不熟練労働の一般化と相まって、労働日の無際限な延長をもたらす<sup>23</sup> と述べ、さらにつづく c 「労働の強度」では、こうした過度の長時間労働がやがて工場法による規制といった「社会の反作用」を引き起こし、労働日の「外延的大きさから内包的おおきさまたは大きさの程度への転換」<sup>24</sup> をもたらすと論じているのである。

以上のように第 1 節から第 3 節からなる第 I 部の骨格を捉え返してみると、熟練労働者の技能の全面的な機械への置換説を基礎に、不熟練労働が一般化しそのもとで絶対的剰余価値の生産が独自の深化を遂げるという機械経営のすがたが、マルクスの描く資本主義的生産の典型として浮かびあがってくる。こうしてマルクスは技能との関連で機械を分析するという重要な問題を提示しながら、けっきょく機械の体系を全面的な「自動装置」<sup>25</sup> と見なすようになる。

道具機が、原料の加工に必要なすべての運動を人間の助力 Beihilfe なしで行うようになり、ただ人間の付き添い Nachhilfe だけを必要とするだけになるとき、そこに機械の自動体系が現れる。<sup>26</sup>

という像が、一つの理念としてかもしれないが強調されることになるのである。「助力」は必要ないが「調整」は必要だという、この区別はそれだけでは不分明だが、以上の整理をふまえれば、前者は熟練労働者に関わるものであり、これに対して後者が不熟練労働者を指していることはすぐに推測できる。しかし、このような「機械の自動体系」がはたして子供や婦人まで含む大量の労働者を付き添いとして呑み込むことになるかどうか、絶対的剰余価値の前提となる総労働量の増大と、機械経営の普及がどのように一つの画面に収まるのか、この点がただちに疑問となる。そしてここから逆に振り返ると、そもそもその出発点に、すなわち技能置換説に問題があったのではないかと思われるのである。

## 2.2 自動化工場とその帰結

ところで第4節から第7節にいたる第II部の主題は、この「自動装置」に基づく生産様式の社会的影響を論じたものとなっている。マルクスは第4節の冒頭で第I部の内容を簡単に要約した後、次のように述べ自動化工場の全体像に考察の場を移す。

自動化工場のピンドロスであるユア博士は、この自動化工場を、一方では、「一つの中心力（原動力）によって間断なく作動させられる一つの生産的機械体系を、熟練と勤勉とをもって担当する、成年・未成年のさまざまな等級の労働者の協業」であると記述し、他方では、「一つの同じ対象を生産するために絶えず協調して働く無数の機械的器官および自己意識ある器官—その結果、これらすべての器官が自己制御的な一つの動力に従属する—から構成されている一つの巨大な自動装置」であると記述している。これらの二つの表現は、決して同じではない。第1の表現では、結合された全体労働者または社会的労働体が支配的な主体として現れ、機械的自動装置は客体として現れている。第2の表現では、自動装置そのものが主体であって、労働者はただ意識ある諸器官として自動装置の意識のない諸器官に付属させられているだけで、後者とともに中心的動力に従属させられている。第1の表現は、大規模な機械のありとあらゆる使用にあてはまり、第2の表現は、その資本主義的使用を、それゆえ近代的工場制度を特徴づけている。<sup>27</sup>

ここには、自動装置そのものとその資本主義的使用とを分離して捉えることの必要性が強調されており、この区別はマルクスの唯物史観の当然の帰結として第13章全体を貫く基調となっている。「自動化工場」はいわば新たな生産力を代表しており、これがその資本主義的使用と矛盾するというわけである。しかし、総論賛成・各論反対ともとれるこの解答は、聊か優等生的すぎてかえって腑に落ちない。この「自動化工場」なるものは、はたして資本主義の枠内で実現される、その純粋像なのか、それともその内部では現実化しない、いわば将来像なのか、という疑問がすぐに浮かんでくる。労働体が主体なのか自動装置が主体なのか、これは両立しがたい状態であり、前者を自動装置の総論に、後者を各論におくことにはやはり無理がある。また、「自動化工場」がかりに現実の存在となったとき、そのもとでいかなる意味で労働体が主体たりうるのか、この点も疑問となる。マニュファクチュアの解体のもとで現れるような、技能を根こそぎ失った労働者が、本当にそのままの状態では主体となり、機械装置を客体として処理することが本当に可能なのか、そのすがたを思い描くことは難しい。

だがマルクス自身はさしあたり、「自動化工場」をマニュファクチュアの限界を克服した資本主義的生産の実像として捉え、上記の引用に続けて、その社会的労働体の構成について、次のように述べる。

自動化工場では、マニュファクチュア的分業を特徴づけている専門化された労働者たちの等級制に代わって、機械の助手たちが行わなければならない諸労働の均等化または平準化の傾向が現われ、部分労働者たちの人為的につくり出された区別に代わって、年齢および性の自然的区別が主要なものとして現われる。<sup>28</sup>

ここでマルクスが自動化工場における労働の特性として「専門化された労働者たちの等級制」に対する、「労働の均等化または平準化の傾向」を指摘している点は注目してよい。

ただこれに続く説明をみると、「平準化」とはすなわち単純化のことであり、「自動化工場」における労働は全面的に技能を機械装置に置換されてゆくという第I部の結論を引き継ぐものであるこ

とは明らかである。すなわち、この「機械の助手たち」となった労働体の内部は、「現実に道具機について働いている労働者（このなかには動力機の見張りや給炭をする何人かの労働者も加わる）」と、この機械労働者の単なる手伝い（ほとんど子供ばかり）」さらにこれら「主要部類のほかは機械装置全体の調整や平常の修理に従事しているその数から見ればとるに足りない人員」<sup>29</sup> というかたち具体的に描かれる。そしてこの節の後続部分では、労働者の従属、資本の専制が機械装置の資本主義的充用の結果として強化され、厳密な指令監督として「兵營的な規律」<sup>30</sup> が支配し、フリーエが「緩和された徒刑場」<sup>31</sup> と形容した悲惨な労働環境として、「自動化工場」の現状が報告されている。

この第4節に続く第5節「労働者と機械との闘争」は、こうした自動化工場にいたるいわば前史を論じたものといつてよい。ここでもマルクスは「労働者が、機械をその資本主義的使用から区別し、したがって攻撃的を物質的生産手段そのものからその社会的利用形態に移すことを覚えるまでには、時間と経験が必要だった」<sup>32</sup> と述べ、ここでも機械装置そのものと「資本主義的使用」との形式的区別が繰り返されるのである。だがこのような「資本主義的使用」によって、労働者の従属が一方的に深まるのみだとすれば、そこからの脱却はどのようにして可能なのか。

この問いに対するマルクスの解答は、これに続く第6節「機械のよって駆逐される労働者に関する補償説」ならびに第7節「機械経営の発展に伴う労働者の排出と吸収 綿業恐慌」のうちにかなりはっきり示されている。一言でいえば、雇用労働者の絶対的収縮、あるいは雇用状態の不安定性の増大が自動化工場にもとづく生産様式の内在的な限界となって現れるという主張である。これはすでにふれたように（本稿7頁）第7篇「資本の蓄積過程」の展開を先取りした内容となっている。工場の内部においては、その悲惨さがかえって労働者の一方的な資本への従属を余儀ないものとし、第5節に示されたように、機械装置による技能解体に対する反抗が挫かれてゆく以上、そこから変革の契機は生まれてこない。

それゆえマルクスはけっきょく、「一定の発展に達すれば、工場諸部門の異常な拡張は、充用労働者数の単に相対的な減少だけではなく絶対的な減少とも結びついていることがありうる」<sup>33</sup> という点に、この生産様式の根本的な限界をみいだすことになる。このような雇用収縮の命題は、資本構成の高度化という価値論的な枠組みを用いて第7篇のなかで厳密化が図られるのであるが、その実体的基盤はこの第13章に求められる。あるいはまた、「機械経営におけるこの質的变化は、絶えず労働者を工場から遠ざけ、あるいは新兵の流入にたいして工場の門戸を閉ざすのであるが、他方、諸工場の単に量的な拡張は、投げ出された労働者のほかに新しい補充兵をも飲み込むのである。こうして、労働者たちは絶えずはじき出されては引き寄せられ、あちこちに振りまわされ、しかもそのさい招集されるものの性別や年齢や熟練度は絶えず変わるのである。」<sup>34</sup> という雇用の不安定性の側面からもこの生産様式の現実的な限界は指摘されてゆく。これもまた、マルクスが「資本主義的生産様式に固有な人口法則」<sup>35</sup> として論じた事態と内容のみならず表現までもびたりと合致するのである。

たしかに、「資本の蓄積過程」では、蓄積の進行という時間の経緯を視野にとりこみ、ますます接近する将来像、やがて行きつく究極像として、相対的過剰人口の増大と不安定な雇用状態が理論的に解明されている。これに対して、第13章のこの部分では、機械の資本主義的使用と、その本来的な使用という理念的な対比論が基調となっているという違いはある。しかしそのぶん第13章の第II部は、固有の意味での資本主義的生産様式とはなにか、という基本問題に対して、機械経営にもとづく工場制度、自動化工場、をむしろ実像として提示するかたちになっている。ここでは現実の資本主義的生産は現実に、この単一の生産様式に収斂するかのように説かれているのである。

## 2.3 大工業と資本主義的生産様式

ところが『資本論』ではこの後、以上のような機械そのものや自動化工場の分析とはかなり異質な考察が展開されてゆく。第8節の「大工業によるマニファクチュア、手工業、家内労働の変革」という表題に端的に表されている問題がそれであり、その説明は第9節や第10節に延長されてゆく。第13章を締めくくるこの第III部では、すべての生産部門が機械化され大工業に到達した状態ではなく、この機械化の傾向がその他の生産様式に及ぼす諸作用が主題となる。いわば過程の理論であり、また生産様式の接合の理論である。従来この部分は機械制大工業の普及について付随的に論じたものにすぎないと見なされ、また夥しい歴史的な事例の交錯も禍して理論研究の圏外に放置されてきた。だが今日の観点からあらためて『資本論』を読み返すとき、むしろこの部分こそ眼目となるのではないかと考えられる。

たしかに、ここでもマルクスは、基本的には大工業と工場制度への収斂説にたっているとみてよい。たとえば、第8節の冒頭のa「手工業と分業にもとづく協業の廃棄」においても「すでに見たように機械は手工業にもとづく協業を廃棄し、また手工業的労働の分業にもとづくマニファクチュアを廃棄する。」<sup>36</sup> というように、機械による工場へ移行せざるをえないという認識がまず表明される。しかし、たとえば新しい産業の勃興を考えた場合、いきなり機械経営にもとづく工場制度で出発することになるのかどうか。マルクスもその場合には、一般に「工場経営への過渡」<sup>37</sup> が存在することを暗黙裡に認めている。たとえばいまの引用に続けて機械によるマニファクチュアの排除の例として、A. スミスがよく知られたピン工場の例に言及するのであるが、その場合も実は「単一の道具機が協業やマニファクチュアに代わって現れるかぎりでは、この道具機そのものがまた手工業的経営の基礎になることができる」<sup>38</sup> という。すなわち、縫針製造用の機械がただちに巨大な自動化工場を生みだすのではなく、むしろ逆に自分の機械を保有する小規模な「機械にもとづくこのような手工業経営の再生産」につながる可能性を指摘している。たしかに、この種の「手工業的経営」の再販は「工場経営への過渡」に現れるにすぎず、「機械的原動力」の導入とともに瓦解せざるをえない運命にはある。しかし「機械的原動力」が導入される場合も、つねに大規模な機械経営から始まるとはかぎらず、たとえばコヴェントリの絹織物での「小屋工場」(“Cottage-Fabriken”)のように動力源の商品化という経路をとる可能性もある。マルクスはこの点に関して「この小屋工場と本来的工場とのたたかいは、12年以上も続いた」<sup>39</sup> と述べている。封筒製造や鉄ペン製造でも「工場経営になるまでの短期間の過渡段階として、まず手工業経営を、次にマニファクチュア経営を通った」<sup>40</sup> ことが報告されており、期間の長短はともかく、新しい産業部門はいきなり大規模な機械経営から立ちあがるのではなく、手工業的な基礎のうえに誕生する関係がひろく観察されるわけである。

それだけではない。手工業やマニファクチュアは単に過渡形態として存在するというにとどまらず、むしろ工場制度に随伴する独自の形態として再生する。b「マニファクチュアと家内労働とへの工場制度の反作用」という側面が存在するのである。

工場制度が発展するにつれ、またそれに伴う農業の変革につれ、すべての他の産業部門でも生産規模の拡大がなされるだけでなく、それらの部門の性格も変わってくる。生産過程のそのいろいろな構成段階が分解し、そこに生ずる諸問題を力学や化学など、要するに自然科学の応用によって解決するという機械経営の原理は、どこでも決定的になってくる。こうして、機械は、ある時はこの、ある時はあの部分過程をとらえるために、マニファクチュアに進入してくる。それとともに、旧来の分業から生じたマニファクチュア編制の堅い結晶は解けて、それに代わって不断の変転が現れる。<sup>41</sup>

ここでは、機械経営の原理が既存の生産過程に対する自然科学的な観点からの分解として捉えら

れ、それがマニュファクチュア的な生産過程を繰り返し侵食するとされている。したがって機械経営の発展は非機械経営を必要とするのであり、極言すれば資本主義的生産様式の母胎は分解される側にあるといえなくもない。機械経営は自立的に発展するのではなく、その補完物としてマニュファクチュア経営をつねに随伴する面があるわけである。しかし非機械経営は機械経営の発展のためのいわば養分であり外部を取り込み尽くせばそれ以上の拡張はみられなくなるが、その状態で安定し再生産を持続することまで否定するものではないかもしれない。外縁は発展の条件であっても、自立の条件ではない可能性もあるからである。

だが機械経営とマニュファクチュアとの関係は、前者の后者への浸透というかたちで捉えられているだけではない。マルクスはうへの引用にすぐ続けてつぎのような議論を展開する。

このことは別としても、全体労働者または結合労働人員の構成は根底から変革される。マニュファクチュア時代とは反対に、いまや分業の計画は、婦人労働やあらゆる年齢層の子供の労働や不熟練工の労働、要するにイギリス人がその特徴をとらえて”cheap labour”安い労働と呼んでいる労働の充用をできるかぎり基礎とするようになる。このことは、機械を使用するかしないかを問わずすべての大規模に結合された生産にあてはまるだけでなく、いわゆる家内工業にも、それが労働者の自宅で営まれるか小さな作業場で営まれるかを問わず、あてはまる。このいわゆる近代的家内工業と古い型の家内工業とは名称のほかには何の共通点もないのであって、後者のほうは、独立な都市手工業者と独立な農民経営、そしてなによりもまず労働者家族の家を前提とするものである。家内工業は今では工場やマニュファクチュアや問屋の外業部に変わっている。資本によって場所的に大量に集中され直接に指揮される工場労働者やマニュファクチュア労働者や手工業者のほか、資本は都市のなかや郊外に散在する家内労働者の別軍をも、目に見えない糸で動かすのである。<sup>42</sup>

ここでは機械経営が支配的なものとなるにつれ、その反作用としてその外部の生産様式にも変化が生じる点が論じられている。そこでは機械を使用しようといまいと、家内工業も含めすべての規模の産業で、機械経営と同様に、不熟練労働を基礎にした労働編制がみられるようになるという。そこにもしほんとうに「名称のほかには何の共通点もない」というほどの決定的な断絶を認めるのであれば、それは旧来の生産様式の分解でも、あるいはその裏返しの温存でもない。「近代的家内工業」も「近代的マニュファクチュア」とともに、資本主義的生産様式の新たな構成要素として独自の生成を遂げたものとみるべきなのである。少なくとも、ここでの記述にしたがうかぎり、資本は全産業を一律に機械経営にもとづく工場制度に包摂するというのではないことになる。資本主義的生産様式は、機械経営を基軸としながら、同時に「近代的マニュファクチュア」や「近代的家内工業」を内包する多層的な生産様式として性格づけられるわけである。

このように直接機械によって技能が解体されることがなくても、機械経営のなかで不熟練労働が支配的になれば、その反作用としてひろくそうした労働にもとづく生産編成が普及する関係は、分散的な家内工業にかぎるものではない。つづくc「近代的マニュファクチュア」すなわち「本来の工場以外のすべての大規模な作業場」<sup>43</sup>においても妥当するものとされている。マルクスは、このc項とつづくd「近代的家内労働」において「過度労働」の利用の実例を示した後、e「近代的マニュファクチュアと近代的家内労働との大工業への移行 これらの経営様式への工場法の適用によるこの革命の推進」において工場法がこれらの領域ではたした独自の役割を明らかにする。このe項の主題は、冒頭における次の認識にある。

女性や未成年者の労働の単なる乱用、いっさいの正常な労働条件と生活条件との単なる強奪、過度労働と夜間労働との単なる残虐、このようなことによって労働力を安く

することは、結局は、もはや越えられない一定の自然的限界にぶつかり、またそれとともに、このような基礎の上に立つ商品の低廉化も資本主義的搾取一般も同じ限界にぶつかる。ついにこの点にきてしまえば、といってもそれまでには長くかかるのであるが、機械の採用の 때가 告げられ、また分散していた家内労働（あるいはまたマニファクチュア）の工場経営への急速な転化の 때가 告げられる。<sup>44</sup>

過度労働の限界によるこの工場経営への転化も自然発生的に進むというのではなく、「工場法がマニファクチュア経営から工場型への転化に必要な物質的諸要素を温室的に熟成される」<sup>45</sup> というように、工場法の役割に力点が置かれている。<sup>46</sup> この転化は、特別剰余価値の理論<sup>47</sup> で想定されるように、同じ産業部門内で展開される価格競争の結果、近代的マニファクチュアが機械経営に淘汰されるというのではない。両者は異なる産業部門にもともと棲み分けてきたのである。近代的マニファクチュアや近代的家内工業は、不熟練労働を基礎に再編され、自動化工場に馴染まない分野に適合した生産様式であったはずである。ここでの転化は、機械経営のほうにまず適用された工場法が、機械に依拠していない生産部門にまで拡大された結果なのであり、その点で機械経営と近代的マニファクチュアや近代的家内工業の重層的な生産様式に内在する原理によって生じたものとは必ずしもいえないわけである。

第9節「工場立法（保健・教育条項） イギリスにおけるその一般化」は、本来機械経営の成立以来の工場立法が、保健・教育条項という側面を中心に、婦人労働や児童労働に基礎をおいた近代的マニファクチュアや近代的家内労働に一般化されていったという前節の論点を具体例でさらに補強する内容になっているが、この節の後半ではもう一度異なる生産様式の接合に関して、一般的な説明が加えられている。

すでに見たように、大工業は、一人の人間の全身を一生涯一つの細部作業に縛りつけるマニファクチュア的分業を技術的に廃棄するのであるが、それと同時に、大工業の資本主義的形態はそのような分業をさらにいっそう奇怪なかたちで再生産するのであって、この再生産は、本来の工場では労働者を一つの部分機械の自己意識ある付属物にしてしまうことによって行われ、そのほかはどこでも、一部は機械や機械労働のまばらな使用によって、また一部は婦人労働や児童労働や不熟練労働を分業の新しい基礎として取り入れることによって、行われるのである。<sup>48</sup>

ここでも、「本来の工場」と「そのほか」とが、重層的に「大工業の資本主義的生産様式」を構成するものとして、マニファクチュア的分業と対比されており、資本主義的生産様式が一様にすべての部面を覆うというように捉えられてはいない。このような資本主義的生産様式の二重性は、第13章の最後に位置する第10節「大工業と農業」のうちにも、農業がもつ技術的な要因や歴史的な背景を考慮しつつも、基本的には同型の問題として再論されている。

さて以上のように第13章の第III部の骨格を洗いだしてみると、そこには第I部で示された機械＝技能置換説や、第II部における社会的再生産の全面的な自動化工場への転化という認識とは決定的に異なる資本主義的生産様式の像が浮かびあがってくる。同質の生産様式への収斂論と対照的なこの接合論的視角は、どのように解釈したらよいのであろうか。マルクスが表明しているように、本来の一般的な資本主義的生産様式へいたる所詮過渡形態にすぎないのか。しかしそれにしても、マルクスが盛り込んだ当時の豊富な実例は、この第2の像に現実性を与えている。自動化工場への過渡形態に還元できない資本主義的生産様式の二重性、ここに謎は残るのである。以上で整理した「機械と大工業」の理論構造をふまえ、さまざまな事例に埋もれた第13章の記述のうちに、この二重性の正体を探ってみよう。

### 3 資本主義的生産の基本構造

#### 3.1 技能の置換と分解

前節で整理したように、第13章の第I部においてマルクスは、道具機に焦点を絞ることを通じて、機械の観点から労働者の技能を考察しているのであるが、その基本を一言で要約すれば、熟練労働者の技能は全面的に機械装置によって置き換えられるという機械=技能置換説とでも称すべきものであった。言い換えれば、熟練労働者の技能が機械経営の内部でまず分解変質しつぎに機械化されるといった、機械=技能解体説的な視点が極端に弱いということになる。マルクスの場合、技能の分解は第12章で説明済みのものとされ、極言すれば、第12章は分業=技能分解説に、第13章は機械=技能置換説にそれぞれ特化している観が否めない。その結果マルクスの説明論理は、模式化すれば、

熟練労働者 + 不熟練労働者 → 機械装置 + 不熟練労働者

という転換経路が中心となっている。しかし、

熟練労働者 + 不熟練労働者 → 熟練労働者 + 機械装置

という経路も論理的には考えられるのであり、むしろこちらのほうが機械装置の原理から推定される基本経路ではないのか、というのがここでのおよその結論である。

なぜこう考えられるのか、その理由を説明してゆこう。はじめに、機械装置によって労働者が置き換えられるとはどういうことなのか、置換説の内容をはっきりさせておきたい。その場合、従来の技能が一挙に意味を失い消滅するという自体は、たしかに生産方法の根本的な革新に伴ってしばしば観察されてきたことであり、それが新たな機械装置の導入を契機とするということも事実である。容器生産で素材が陶器から合成樹脂に転換されれば、製陶法はもはや無意味となり、車両が木製から鋼鉄製に変われば、木工技術は無用となる、輸送手段が船から鉄道に移れば、操舵術は過去の遺物となるなど、既存の技能が一挙に陳腐化することはある。このような事態があるいは機械=技能置換説に現実味を与えるのかもしれないが、しかしこれは厳密な意味での技能の置換ではない。新しい加工素材や労働手段の採用は、それはそれでやはり労働者を必要とするのであり、そこに技能の修得の難易はともかく新たな技能の発達を随伴する。

マルクスが道具機に焦点を絞りながら論じているのは、このような意味での旧来の技能の断絶ではなく、現在労働者が道具を用いておこなっているその動作を機械装置に移すことである。窯の温度を調整し燃料を加減したり、木材を成形し組み立てたり、風をうけ波を避け目的地に向け舵をきるといった労働内容を労働者の意識的な操作から切り離すことなのである。むしろ全く同じ動作を同じ規模で機械化する必要はないが、労働者の操作する道具を機構に組みこむという置換説の要点は作業内容の同質性にあり、同じことが機械装置のできるから人間労働から技能性が消滅することになる。

しかしこのような意味の置換は、既存の技能内容をそのままのすがたに維持したままでほんとうに可能なのであろうか。左記のようにマルクスの場合、労働内容の細分化がマニファクチュア的分業において進むとされ、機械化の過程で労働内容が変質するという側面がほとんど論じられていないため、機械装置では技能の置換だけを前面に押しだした説明になっている。たしかにマニファクチュア的分業における労働の細分化それ自身は、労働の単純化と同義ではない。労働の細分化が一面で技能の発達を伴う点は、マルクスとともに確認しておこう。労働内容をそれぞれ特徴的な領域に分割することは、ただちに技能の消滅を意味するのではなく、むしろさまざまな特殊技能を深化させる不可欠の契機となる。ただこの細分化された技能は、単独で発揮されるものではなく、

熟練労働者の緊密な連鎖のもとに機能する、いわば労働体の技能という性格を帯びるのであり、この連鎖構造の機構化こそが実は自動化にとって真の障壁をなすと考えられる。この点はともかく、細分化が労働者の技能をますます精緻化させる方向にはたらくとすると、そこに鮮明となる人間固有の労働能力、事前に計画できない不規則な外的攪乱に抗し、目的に向け自覚的に過程をコントロールする能力を機械装置に移すことはますます難しくなる。

しかし、労働の細分化は必ずしもこのような技能の高度化だけに帰結するとはかぎらない。それは単純な要素を生み出すという効果を同時に伴うのである。マルクスも第13章の終わりに近い部分で次のように述べ、この効果に言及している。

各生産過程を、それ自体として、さしあたりは人間の手をなんら考慮することなく、その構成要素に分解するという大工業の原理は、<sup>テクノロジー</sup>技術学というまったく近代的な科学をつくり出した。社会的生産過程の多様な、外見上関連のない、骨化した諸姿態は、自然科学の意識的な計画的な、そしてめざす有用効果に従って系統的に特殊化された応用に分解された。技術学は、使用される道具がどれほど多様であろうとも、人間の身体のあらゆる生産行為が必然的にそのなかで行なわれる少数の大きな発見したのであるが、それはちょうど、機械学が、機械がどんなに複雑であっても単純な機械的能力の絶え間ない反復であることを見誤らないのと同じである。<sup>49</sup>

ここでは後のテーラリズムに通じるような動作分析の原理が「技術学」の名のもとに概括され、複雑な運動を単純な原理の組合せと反復によって実現する「機械学」との共通性が指摘されている。だが多少注意して読めばわかるように、第1に、ここで「機械学」はただ「技術学」との対比のために持ちだされているすぎず、必ずしも「技術学」による「基本的運動諸形態」の発見が、「機械学」による機械装置への技能の置換を可能にしたとか、況や逆に機械装置の導入によって労働の分割原理が可能となったというでもない。第2に、「大工業の原理」とされている以上、それはマニファクチュア的分業とは異なる労働の分割原理が論じられているとみてよいのであろうが、しかしその違いは必ずしも明示されていない。マニファクチュア的分業ではいかなる技能をも必要としない単純労働が労働の細分化から部分的に発生するのに対して、「技術学」に基づく「大工業の原理」は、労働過程全体を外部から客観的に観察することで、簡単な要素に分解するといった違いがあるように推察はされるが、この点も明確に論じられているわけではないのである。

ここに踏みとどまって考えておくべき問題が残っている。はたして技能の解体は、このように全面にわたり等質に進むものか、それはいわば積木細工を崩すように、ばらばらの破片となり、いっさい跡形を止めぬものとなるのか、という問題がそれである。技能の解体がこのような意味で進むのであれば、解体説であっても行きつく先は技能の消滅であり、けっきょく自動装置＋大量の不熟練労働という組合せが支配的となるという第4節の出発点に回帰すること、置換説と同断であろう。それは置換にせよ解体にせよ、全面性という共通項に由来する。とすればこれとは反対に、技能の解体はただその周辺において部分的に進むだけだとする立場が考えられる。裏からいえば、それは技能のうちには解体しにくい核心部分が存在すると考える立場ということになる。温度を調整するために窯に薪を投げ入れる作業自体は、熟練労働者がおこなおうと不熟練労働者がおこなおうと、ある意味では「少数の大きな基本的運動諸形態」であり、大差ないかもしれない。核心はどのようなタイミングでどれだけ投げ入れるかであり、投げ入れ方などにも工夫はあるが、それは相対的に分解しやすい要素に属そう。一般に熟練労働者は、こうして未熟練労働者を指図し労働体を組織し生産工程を管理するのであり、この点はすでに指摘したようにマルクスも強調するところであった。このような側面についていえば、実は技能の解体といってもすべてが「少数の大きな基本的運動諸形態」にばらばらにされるというのではなく、技能の周辺部分が分解され、そこ

に単純な作業が分泌されるとみるほうが適切なのである。見方を変えれば、それは技能の核心部分を絞り込み、その部分を独自に精緻化し発達させることの副次的効果ということもできる。この場合、機械に置き換えられるのは分泌された単純な作業なのであり、機械 = 技能解体説といっても、単純な解体説ではなく、その本質は機械 = 技能周辺分解説とでもいうべきものなのである。マルクスがマニファクチュアにおける労働の等級制を、熟練労働者の解体としてではなく、逆にその特殊な発達として捉えたのは、技能の周辺分解の反面であるこの中心深化の局面だけを強調したものであると解釈できる。

要するにこの技能の周辺分解という観点からみれば、事態は次のようになる。すなわち、労働者の技能の発達は、一面で準備や後処理や補助作業などに単純な要素を分離すると同時に、他面で技能の中心部分では独自の深化を遂げるのであり、機械化はこの分解された周辺部分を機械装置に取りこむことになる。こうして、転換の構造は

熟練労働者 + 不熟練労働者 → 熟練労働者 + 機械装置

という基本経路をもつであろうと推論されるわけである。むろんこれはあくまで論理の基本を形式的に図式化したすぎない。現実はこの単純なものではないというのであれば、一も二もなくその通り、熟練労働者も不熟練労働者も機械装置も混在した複雑な反応過程というほかない。ただ論理の問題として、第13章の第I部に隠されたマルクスの図式を吟味してみると、それとは対蹠的な経路が整合的なものとして浮上してくるのである。

最後に2点ほど補足しておこう。第1は、このような周辺部分説をとったとしても、充分時間をとればやはり機械化のもとで労働者の技能は消滅する結果にたどりつくのではないか、という疑問に対してである。たしかに分解される技能が固定しているのであれば、周辺部分から分解が進めばやがて芯は細り、いつかは完全に機械装置に置き換えられるということになる。しかし、すでに述べたように、技能の周辺部分の分解が核心部分の発達を伴うとすれば、結果は簡単にはきまらない。むろん陶器製造の温度管理とか、手動の操舵法とかいった技能内容を限定すれば、その発展には限度があろう。しかし、こうした技能はたとえばコンピュータを扱う技能に転化してゆくのであり、この種の新たな「道具」は付随的な技能を生みだす。周辺が分解されるなかで、技能の核心部分はその質を変化させることも考慮しなくてはならない。<sup>50</sup> こうした側面まで含めて考えるならば、技能の周辺分解がいずれは技能の消滅に帰着するというにはならないと考えられるのである。第2に補足しておきたいのは、機械装置のもとで多くの不熟練労働者が労働するという状態は考えにくいというが、同様に熟練労働者が機械装置を操作するという事態も通常ありえないのではないか、という疑問についてである。すなわち労働者の技能と機械装置との関係にかかわる問題である。むろんこの場合、労働者の技能は機械装置の操作を目的とするものではない。機械装置の発展がその自動化にあるとすれば、その補修や点検のような操作は残るにせよ、この種の技能が核心をなすのではない。それは機械装置にまだ置き換えられない側面で、すなわち完全には定型化されてはいないが、労働者が適当に管理すれば所定の目的を実現できるような側面で発揮されるものである。一般にはマルクスが「労働過程」において描いたように、労働主体は労働手段を媒介に労働対象に働きかけるといってよいのであるが、労働者の技能は自動的な機械装置を対象に発揮されるのではなく、背後の機械装置は監視しつつなお自動化できない過程に向けて発揮されるとみるべきである。技能に関わる労働手段は、労働主体の操作を必要とするという意味で、やはり道具性を具えている点を確認しておきたい。

### 3.2 生産の自動化と労働の規格化

ではこの技能の周辺分解説にたった場合、それは同時に、手工業的な熟練を基礎とした労働が、マルクスがマニュアル的的分業として描いた状態で存続すると主張することを意味するのであるが、次にこのような問題に検討を進めてみよう。たしかに周辺分解説は、マルクスのように熟練労働者の技能が機械装置に置換される、あるいは少なくとも全面的に解体され消滅するとはみないわけであるが、しかしこの否定はただちに、手工業的な熟練がそのまま残り、労働者の間の技能の相違が多様な複雑労働の存在として重要な役割をはたすという結論に直結するわけではない。そこには異なる可能性が潜んでいるのであり、この点こそさらに究明を要する論点なのである。

この問題を考えるうえで、自動化工場における労働の特徴を、単純化に先立って、ひとまず「均等化または平準化の傾向」と規定していた点（本稿 11 頁）が一つの手がかりになる。単純化は平準化をもたらすが、平準化は必ずしも単純化を意味するものではない。ここにこそまさに周辺で単純化されながら存続する技能の特性を理解する鍵がある。というのも、すぐにわかるように、平準化それ自身は必ずしも労働者の技能の高度化と矛盾しないからである。かりに技能の修得に要する時間を目安にとるとして、資本主義の長期的な発展の過程で労働者の技能がますます単純なものになっていったといいきることには無理がある。しかし、それぞれの職種における技能水準は平均的に上昇しながら、その間の格差が縮小するという事態は充分考えられる。だれでも即座にできるほど単純ではないが、その修得に一定期間努めればやがてこなしうる程度に要素化されてた技能が支配的となるという意味で、単純化とは異なる平準化の可能性も考えられるのである。

この可能性の介在はなにを示しているのであろうか。そこに露呈しているのは、資本主義的生産のもとで、技能は単純化により消滅するわけではないが、さりとて従来の技能が没交渉にそのまま存続するわけではなく、独自の変容を遂げ特殊な性格を帯びざるをえないという、技能変異の位相の存在であろう。この変異の位相は、平準化をその一形態として含むとしても、さらに多様な形態を含むものと考えられる。この位相を規定している特性はなにか。それはある種の客観的な評価可能性といってよい。技能なるものが個々の労働主体に帰属すると見なすと、労働の成果を事後的に評価する場合とは異なり、ばらついた技能をそれぞれ個別的に評価する困難が生じる。こうした場合しばしば、一定の水準に達しているか否かで判別する、いわゆる足切りの手法がとられる。最低水準を満たしているかどうかという単純な基準で、個別的な絶対水準の評価が困難な世界に集団的均質性を仮構するのである。この種の操作を規格化とよぶとすると、この規格化は、資本主義的生産たることから二重の意味で不可避となる。

第 1 に、資本主義的生産様式がなによりも労働の組織化を基礎としている点に起因する規格化の要請がある。それはマルクスが強調したように、集合力を利用する労働体に基礎をおくものであり、その点で先行する独立手工業者の生産様式の対極に位置する。むろん資本は賃金を個々の労働者に支払い、基本的に一面識もない無機的な労働者たちを雇用するのであるが、しかしその労働を資本は有機的な労働体に組織化するのであり、この点に独立生産者の生産物を単に購入するのとは異なる、集中・集積と不可分な資本の優位性が潜んでいる。

このような労働過程の社会的組織の特徴をマルクスは次のように的確に特徴づけている。

一方の労働者は、直接に他方の労働者に仕事を与える。それぞれの部分過程で目的とする有用効果を達成するために必要な労働時間は経験的に確定されるのであって、マニュアル的の全機構は、与えられた労働時間内に与えられた成果が達成されるという前提に立っている。この前提のもとでのみ、相互に補足しあうさまざまな労働過程が、中断することなく、同時にかつ空間的に平行して、続行できるのである。労働相互の、それゆえ労働者相互のこの直接的依存が、各個人にたいして自分の機能に

必要な時間だけを費やすよう強制するのであり、そのため、独立の手工業の場合とは、また単純な協業の場合とさえも、まったく異なる連続性、画一性、規則性、秩序、とりわけ労働の強度までもが生み出される、ということは明らかである。<sup>51</sup>

このような労働体の編制においては、所定の時間にきまった仕事量をこなす規格化された技能が前提となるのであって、個性的な属人能力が求められているのではない。一定の予想が外部からみて成立するような作業が確実に消化されることで、全体のバランスもとれ、計画的な調整も可能となる。むろんこの場合も、どの労働者でもただちにこなせるような、きわめて単純な作業の組み合わせに徹底して分解してしまうという可能性も考えられるが、それが唯一の労働体の編制原理ではないし、またその場合にはすぐに自動化がまちうけている。有機的な労働体固有の優位性が発揮されるには、労働主体が関与してはじめて維持されるような組織性なのであり、そこでは所定の目的を確実に実現するような、そのための最低限の技能がまず要請されるのであり、その画一性、規則性の修得に一定の訓練が前提となる。こうした労働組織を前提とした規格化とそこにおける技能の特性は、第13章においてまったく問題にされていないわけではないが、それが機械装置による熟練労働者の排除と不熟練労働者への転化という図式に支配され、けっきょく機械装置に付随する単純労働の問題に還元されているのである。

第2の規格化の契機は、この技能が労働力の売買というフィルタを経由して、生産の場に流れ込んでくることに由来する。この種の技能も市場において競争的に取り引きされる以上、売り手も買い手もそれぞれなにを取り引きしているのか、その内容が了解可能なものとなっていることが前提となる。むろん買って使ってみないとその真価はわからないという限界はつきまとう。これは一般商品にもある程度通じることである。<sup>52</sup> ただその場合でも、売買の対象となっている商品体が明瞭であることが、それを安く買おう、高く売ろうとする、その行動の基礎となる。こうして労働力とともに売買される技能は、明示的にであれ暗黙裡においてであれ、ある種の型を与えられ、一定の最低水準を満たすものとして規格化されるのであり、そのことで実質においてある程度差異があるにしても、あるランクの技能として一律化されることになる。こうして同じランクに属するそれぞれ型づけられた技能と認定されることで、同種の労働者が多数存在することになり、ここにはじめて競争的な労働市場も形成されることになる。

むろん、すべての技能がこうした規格化に馴染むというわけではない。やってみないとわからない側面が強い性格の活動も存在するであろうが、それらは市場における売買の対象とはなりにくいのであり、もしそうしたものをどうしても資本が包摂する必要があるとすれば、資本家活動の一翼を担うものとして内部化するほかないのである。これに対していま問題にしている、トラック運転手とか、配管工とか、経理担当とか、看護師とか、資本家の組織化の対象される労働者の場合、それぞれの職種にはそれに応じた技能は存在するが、この種の技能はそれぞれの範疇のなかで基本的には規格化される。それぞれの労働者の技能が実質的において同一というわけではないが、この個人差を売買の対処とすることは難しい。周知のように『資本論』も、この問題を第1巻第6篇「賃金」のなかで、出来高賃金として論じているのであるが、この方式は労働の組織化が未発達であることの反映でしかない。それが有機的な労働体に成長すれば、労働内容の規格化が進み、同じ職種における個人的な差異を商品化することはますます困難になるのである。

こうして、生産組織の側面からも労働市場の側面からも、資本による労働編制である以上、技能は規格化され最低水準が形成されるとみてよい。資本主義のもとで労働は、一面で周辺が分解され、単純化された労働が排出され、さらに機械装置に置換されることになる。他面でこの結果洗いだされる労働者の技能も、新たな分化と高度化を伴いながら、定型化されたモジュールとしての性格を帯びるのである。たしかにこの両面はともに「均等化または平準化の傾向」と概括することは

できなくもないが、しかしその内部には大きく二方向に分解できる力がはたらいている。一つは生産の自動化であり、もう一つは労働の規格化であり、そこにはいずれか一方の力に還元できない原理的直交性が潜んでいる。むしろこれは複雑な現実を整理するための図式にすぎないが、ともかく規格化を単純化と同一視し技能の消滅と捉えることはできない。この点でマルクスが第13章の第II部で描いた、自動化工場のもとで大量の不熟練労働者が過剰人口とともに形成されるという資本主義的生産様式のすがたを一般化することは原理上是認できない、これがここまでの結論である。

### 3.3 二重の生産様式

では以上の考察をふまえてみると、第13章の第III部に示唆されたような、資本主義的生産様式の内部接合ないし二重性の問題はどうか解釈すべきか、この問題に移ろう。すでに明らかなように、もしすべてが単一の基本傾向に還元できるのであれば、この問題は消滅する。その場合には、第II部でマルクスが描いた自動化工場の一元支配という収斂説をとることもできよう。あるいは現実には必ずしもそうはなっていないが、本来の純粹な資本主義であればその内部が一様な単一の生産様式を有するはずだという想定にたつことは不可能でないかもしれない。しかし自動化と規格化との直交性は、このような収斂説や単一の純粹像の想定に根本的な疑問を投げかけ、むしろ機械経営による大工業と近代的マニュファクチュアや近代的家内工業との併存が常態たりうることを示唆する。マルクスはこの併存はあくまで「過渡形態」にすぎぬとみたのであるが、過渡はたえざる過渡として、資本主義的生産の基本構造をなすと考えられるのである。

この基本構造は抽象度を違えて捉え返すことができる。さらに抽象化する方向で考えれば、生産の自動化が労働者の技能を駆逐するものではない点には、生産と労働との間のずれに関わるさらに原理的な論拠がある。<sup>53</sup> 概念的に煮つめてゆくと生産と労働とは、一部が重なる中心の異なる二つの円でしばしば表象される包含関係にある。計量可能なものの増大と定義される生産は、人間の目的意識的な活動としての労働と密接な関連はあるとしても、「労働過程」をその結果からみれば「生産過程」となる<sup>54</sup> といった表裏の関係にあるわけではない。『資本論』でも第2巻では「労働時間を超える生産時間の超過」<sup>55</sup> という問題が提示されている。その即物性故しばしば古い経済原論の教科書などで紹介されているが、マルクス自身も労働のやむを得ない中断として消極的に扱っているに過ぎず、これと自動化を結びつけるのは聊か荒唐無稽に思われるかもしれないが、自然力の利用という内実には連続性がある。小麦はある温度と水分で発芽し、ワインは貯蔵庫で発酵し、なめし革の化学処理はある期間を要するが、これらが自然過程であるとするれば、ある温度で陶器が焼きあがることも溶鉱炉の内部で鉄鉱石が溶解することも自然過程であろう。綿花から綿糸が紡がれる過程が自動化されれば、それもまた一種の自然過程への還元ということになる。むしろ、生物の成長や物質の反応と異なり、機械的な過程の自動化には固有の困難があり、また目的に沿った自然過程を進める装置自体の建設には直接間接に多くの人手を要することはたしかであるが、それは必ずしも絶対的な区別の指標にはならない。

ここで生産と労働が表裏の関係にあれば、生産の自動化は労働の消滅を意味するが、労働の場はそこから自然力に委ねるだけでは初期の目的に到達できない局面へと移ってゆく。そこには人間の欲求と労働との本源的な結びつきがある。もともと人間の欲求の充足は、その欲求の内容をまず自覚し、それを意識的に追求し達成するという過程をとるのであり、そこにマルクスが「労働過程」において合目的な活動として描いた労働と不可分な性格があるのである。あたかも胃袋に自動的に食物を流し込むようなかたちで人間の欲求全般が解消されるわけではない。そこには欲求の多様化とそれを実現する自動化しえない固有の技能が不可避的に派生する淵源があるのである。

逆に抽象度を引き下げて別の角度からみれば、次のようにいうこともできる。このような自然力

の利用としての自動化は、一般に生産系列の上流部門で、いわば素材生産において展開をみるのであり、自動化による大量生産は、その素材をさまざまな用途に加工し、直接的な生活物資に変換する下流部門に多様な労働を叢生させることになる。『資本論』が主として依拠した、19世紀イギリス綿工業に関していえば、たしかにそこで強調されているように、紡績や織布といった部門で自動化が顕著に進んだのであるが、それは安価になった衣料原料を最終消費に結びつける、労働吸収的な加工部門をその下流に拓いたのである。この種の加工する工程は多様で複雑であり、上流部分と同じように簡単に自動化することはできない事情がある。マルクスが第III部で「近代的マニュファクチュア」や「近代的家内工業」の名のもとに描いた実態はここにある。

むろんこの下流部門にも機械経営は浸透する。その結果登場した新たな工場の内部だけを見ると、たしかに自動化がすべてを制覇するかにみえるが、しかしそれは自動化できる工程だけを取りこみ集積したにすぎない場合が多い。逆にいえばそれは自動化しにくい工程を外部に押し出した結果でしかない。素材部分の自動化による大量生産は可能であっても、組立ラインは自動化されているようにみえても、そこへの部品供給は外部の手工業に依存せざるをえない状態は充分予想される。振り返ってみると、マルクスも第II部の出発点では資本主義的生産様式を自動装置と不熟練労働者の併存として捉えていた。このような併存状態は、すでに述べたように、自動化工場の内部に限定するならばたしかに思い浮かべにくい。しかし観点を転じ社会的再生産の総体を視野に納めるならば、自動化工場と規格化された技能を具えた労働者の併存状態は、第III部に示された二重の生産様式とびたりと符合する。それはまた、単にマルクスの時代だけではなく、今日の生産様式にも適合する基本像として直覚しうるところである。

いずれにせよ、自動化は一律に資本主義的生産様式を機械経営一色に塗り込めるわけではなく、自動化できない労働の技能をたえず生みだす面を併せもつといてよい。そしてこの技能に関しては、記述の規格化の力が加わるわけであるが、ここでもう一步先に問題を進めてみよう。もし資本主義的生産様式のもとでも労働のいわば前頭葉たる技能が独自に発達するとみるのであれば、その発達の特性的について、さらに多少とも原理的な説明が求められる。技能の発達は同時に、その周辺分解を通じて労働のいわば後頭部に単純労働を分泌し、自動化工場と機械経営を生み出す。技能の周辺分解と機械装置への組み入れというこの自動化の流れには、定向性が認められる。労働の規格化はこれに直交するとはいえ、やはりこのような定向性が現れると考えるべきでなのであろうか。こうした視点から振り返ってみると、規格化には二つの典型が潜んでおり、それが資本主義的生産様式に真の二重性を賦与している可能性がある。自動化が西から東へ方向へ進むという特性をもつとすれば、規格化には南へ向かうか、北に向かうか、その進路に両極性があると考えられるのである。この点を最後に説明してみよう。

技能の規格化における一つの典型として考えられるのは、マルクスが明示している「等級制」である。『資本論』には、「一社会全体のなかでの分業は、商品交換によって媒介されていなくても、きわめてさまざまな経済的社会構成体に存在するのであるが、マニュファクチュア的分業は、資本主義的生産様式のまったく独自の創造物である」<sup>56</sup>と述べ、さらに第12章第5節を「マニュファクチュアの資本主義的性格」という表題のもとに展開しているように、第13章で論じられる機械経営とともにマニュファクチュア的経営をも資本主義的生産様式として積極的に捉えてゆく一面があった。ただマルクスの場合、「本来的なマニュファクチュア時代、すなわち、マニュファクチュアが資本主義的生産様式のである時代」<sup>57</sup>というかたちで、機械経営とは併存しないものとして捉える傾向が強いが、第13章の第III部では「過渡形態」としてではあれ、ともかく両者の併存を視野に収めた考察をしている。いまここで問題にしたいのは、マニュファクチュアが「支配形態」たりうるかどうかではなく、<sup>58</sup> 資本主義的生産のもとで労働から技能が払拭できないとすれば、マルクスがマニュファクチュア的経営の基礎として、細分化された技能に特化した部分労働者

の「等級制」<sup>59</sup>の名で概括した熟練労働者の技能の処理方式が一つの典型をなすのではないかという点である。

ここで注意する必要があるのは、すでにふれたように、この「等級制」は個別労働者の技能をそれぞれ別個に評価してゆこうとするものではないという点である。その基本は、作業場内分業の観点から工程を分析しそれに必要な諸作業をいわば箱としてまず準備しそれをこなす最低限の技能を外形的な等級を付すところにある。それは能力の等級ではなく、職種の等級であり、技能を職種で型づけしそれを賃金体系に反映させる方式であるといつてよい。一見したところ「等級制」は労働の内容にたちってそれぞれに評価を与えているようにみえるが、実は技能に対する個別的な真の評価が困難なことを前提とした、外面的な規格化にすぎないことがわかる。すでに本稿3.2で指摘した、規格化の要請に生産組織的側面と労働市場的側面の両面があるとすれば、この「等級制」は後者に傾斜した技能の処理方式であることに想到する。とすれば逆にこの流過程的な「等級制」の対極に、生産組織の内部に踏み込んで技能の規格化を進める、処理方式の存在が推定されることになる。「等級制」が賃金格差を基礎に技能を規格化し、この部品化された技能を積みあげることによって労働編制を設計する方式であるとすれば、この対蹠に、賃金が同率化する方向に作業内容のほうを再分割する編成方式が考えられる。むろんそれには市場に替わって多様な技能を実質的に評価する客観的な手段が必要となる。特定の作業がそれに応じた固有な労働手段を操作するものであるかぎり、その特殊な道具は技能を比較する役にはたたないが、もし多様な作業に共通して使われる汎用的な労働手段が出現すれば、それは生産組織を分析し技能を直接評価し再設計する有力な契機となる。この種の汎用的な労働手段は、労働者によって操作される必要があるという意味で、自動化のための機械装置ではなくどのように複雑で高度な機構を具えていても、やはり「道具」という性格をその本質とするのである。この汎用性という特性は、多様な目的を自覚してそれを追求する人間労働に操作されることではじめて意味をもつ。自動性と汎用性とは概念上合致しない指向を含むのである。

この種の汎用的な労働手段と技能の実質的標準化という問題を考えるうえで、マルクスが第13章の最後の部分で示したミシンの例は秀逸である。マルクスはすでにみたように「近代的マニファクチュアと近代的家内労働との大工業への移行」の基本的契機として工場法の普及効果を強調するのであるが(本稿14頁)、「衣料品」[*Wearing Apparel*]ではこれと異なる契機に論及している。この分野における「決定的に革命的な機械、すなわち、婦人服製造、裁縫、靴製造、縫い物、帽子製造、等々のようなこの生産部門の無数の部門をすべて一様にとらえる機械、—それはミシンである」<sup>60</sup>と述べ、直接的な人間の手作業に置き換わるが、しかし同時に汎用性をもった道具機の登場に注目するのである。たしかに、この道具機は文字どおり機械ではあろうが、紡績機や織布機のような自動化にただちにつながるものではない。それは従来の手工業的生産に比べれば、同じ生産量に必要な雇用量を相対的に減少させるかもしれないが、それでも一台一台に労働者を必要とするのであり、その普及がそのまま労働者を工場から閉めだすわけではない。このミシンのもつ汎用性は、やはり一台ごとに入出力装置を備えたパーソナル・コンピュータを彷彿させるのであり、<sup>61</sup>マルクスが第II部で描いた自動化工場の全面化とはかなり異なる資本主義的生産様式の実像が浮かびあがってくる。むろん、そこでも技術進歩は進むのであり、やがては自動化工場の状況に行きつくということはできるが、それには自動制御のための精密工学や情報通信技術の発展などを不可避とし、おそらく100年以上の歳月を要したのであり、しかもそれも技術的に可能となったというにすぎず、一見小綺麗なブランドをまとったこの種の最終加工品は今日でも見方によればマルクスの時代と大差ない、第3世界の労働搾取に基本的に依存している。

最後の点はともかく、このミシンの登場が一挙に「本来の工場」への移行につながるものではないとマルクスが考えていたことは、これに続く次の記述からも明らかである。

社会的経営様式の変革、この生産手段の変化の必然的産物は、種種雑多な過渡形態の入り混じるなかで実現される。これらの過渡形態は、すでにマシンがあればこれの産業部門をとらえている範囲、またとられてからの時間の長さによって違っており、またその時の労働者の状態によっても、マニファクチュア経営と手工業経営と家内経営とどれが優勢かということによっても、作業上の賃借料などによっても、違っている。<sup>62</sup>

ここでマルクスは「種種雑多な過渡形態」というのであるが、この雑種性は機械の汎用性に由来している。それは最終消費に直結し不定型な欲望と反応することに起因するものであり、この過渡性も行き先の定まった一過的なものではない。したがって、経営様式の多様性も最適なものに簡単に陶冶されるとは考えにくい。マルクスはさらにその具体的な事例に論及するのであるが、そこに描かれた状況は、紡績業における自動化工場とはほど遠いものとなるのである。

ではマシンの普及はなにをもたらしただのか。それは端的にいえば労働者の技能の平準化ということになる。

新たなマシン労働者は、もっぱら少女と若い女である。彼女たちは、機械力の助けによって、いくらか重いほうの仕事では男子労働の独占を破り、軽いほうの仕事では大げいの老婦や未成熟な子供を追い払う。<sup>63</sup>

ここで示されているのは、男子労働者の技能が機械装置に置換され、老婦や子供の補助労働が基本となるという図式ではない。技能の解体消滅ではなく、標準的な技能を具えたマシン労働者が支配的となってゆくという新たな事態である。これは、技能を基礎とした労働の細分化と等級制による労働編制が、汎用性をもつ機械のもとで変質し、等級制と対極的な技能の型を生みだすと捉えることもできる。むろん靴をつくるのと、帽子をつくるのでは、それぞれに固有の技能が必要であろうが、それぞれの技能の格差は縮小するであろう。それ以上に重要なのは、帽子をつくる一連の過程がいくつかの部分を経る作業に分割されるなかで、それぞれ共通な基底をなす標準的な技能が形成され、これによっていわゆる流れ作業が可能となるのである。これは技能が消滅し労働者が無用になるというのではなく、等級制とは異なるかたちで技能を処理する独自の労働編制の型が存在するのである。

このように資本主義的生産様式の内部を探ってみると、生産の自動化に直交する労働の規格規格化がまた強い極性を帯びていることがわかる。かかる構造は第13章に陰伏する重層的な生産様式を理論的に再構築するなかで明らかになったものであり、そこに陽表された自動化工場への収斂説、さらにはそれに立脚した第1巻の後半体系の自己崩壊的な資本主義像とは対極をなす。これはまた、資本主義経済はそれに適合的な単一の生産様式を有するのか、という設問に対して、その生産様式は二重性を具え、自己変容を引きおこす内力を秘めていると答えることを意味する。資本主義経済がその型を転換しながら発展するという多様性の認識は、意想外に長命、老いて益々壯の観さえある資本主義経済を対象とする今日のマルクス経済学にとってその鍵をなす。この多様性の解明に際してこれまで、商品経済への純化・不純化という観点を基礎に、生成・発展・没落の歴史として整理する発展段階論にしても、あるいは市場的要因によってのみ構成された原理論に、非商品経済的要因をある基準で詰合せた中間理論を重ねる重箱類型論にしても、資本主義経済の原理像と切り離す方法が支配的であった。現実が複雑多様であることは承知のうえであえてここで極端な図式化を試みたのも、資本主義的生産様式を外的条件に反応し変異する開口部の一つとして取りあげ、集合的な労働編制という基礎条件から変異の構造線を演繹的に導出することで、こうした二分法をこえる方法を探ってみたかったからにほかならない。<sup>64</sup> 資本主義の歴史的变化を捉えるうえで、市場と対抗する生産と労働の内部に理論的な考察の場を可能なかぎり拓いてゆくことは、新たな原理論を構想する契機となると考えるのである。

## 参考文献

- [1] Engels, F *Anti Duhring*
- [2] Marx, K and Engels, F. [1846] 1933 Die Deutsche Ideologie in Karl Marx-Friedrich Engels Gesamtausgabe 1-5. Moskau: Verlagsgenossenschaft Ausländischer Arbeiter in der UdSSR, 『[新訳] ドイツ・イデオロギー』服部文男監訳、1996年、新日本出版社
- [3] Marx, Karl, *Das Kapital, I,II,III*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, Band 23-25, 岡崎次郎訳『資本論』(1)-(9)大月書店、1970年、
- [4] 宇野弘蔵編著『資本論研究』I、筑摩書房、1968年
- [5] 大村泉『MEGAと資本論の成立』、梓書房、199x年
- [6] 小幡道昭「コンピュータと労働」『経済学論集』(東京大学)58-3、1992年
- [7] 小幡道昭「生産と労働」『経済学論集』(東京大学)、1996年
- [8] 小幡道昭「協業と分業」『経済学論集』(東京大学)、1998年
- [9] 小幡道昭「経済原論における外的条件の処理方法」、『経済学論集』(東京大学)、1999年7月
- [10] 阪口正雄「『資本論』の交換問答」、『マルクス経済学』、東京大学出版会、1967年
- [11] 富塚良三『経済原論』、有斐閣、1975年

## 註

1. この用語は『資本論』にはなく、のちにエンゲルスが『反デューリング論』で多用し流布したものである。Engels[1] 参照
2. Marx[3] I, S.534
3. Marx[3] I, S.249
4. Marx[3] I, S.538
5. Marx[3] I, S.377
6. Marx[3] I, S.391
7. Marx[3] I, S.496. Marx[3] I, S.533でも、経済過程全般を指す「生産様式」と区別して、個別的生産過程の内部編制を含意させるために、『ドイツ・イデオロギー』の段階からみつけられる「経営様式」という用語が使用されている。[2] 22頁。
8. Marx[3] I, S.377
9. 小幡 [8]

10. Marx[3] I, S.790
11. Marx[3] I, S.791
12. Marx[3] I, S.394
13. Marx[3] I, S.395
14. Marx[3] I, S.395
15. Marx[3] I, S.396
16. 小幡 [8]
17. Marx[3] I, S.371
18. Marx[3] I, S.389
19. Marx[3] I, S.424
20. Marx[3] I, S.417
21. この点は、富塚 [11] 頁にも指摘がある。
22. Marx[3] I, S.408
23. Marx[3] I, S.426-427
24. Marx[3] I, S.432
25. Marx[3] I, S.402
26. Marx[3] I, S.402
27. Marx[3] I, S.441-442
28. Marx[3] I, S.442
29. Marx[3] I, S.443
30. Marx[3] I, S.447
31. Marx[3] I, S.449
32. Marx[3] I, S.452
33. Marx[3] I, S.471

34. Marx[3] I, S.477
35. Marx[3] I, S.660
36. Marx[3] I, S.483
37. Marx[3] I, S.484
38. Marx[3] I, S.484
39. Marx[3] I, S.484
40. Marx[3] I, S.484
41. Marx[3] I, S.485-486
42. Marx[3] I, S.485-486
43. Marx[3] I, S.489. Marx[3] I, S.385 では、この「近代的マニファクチュア」が「本来的マニファクチュア」との対比で規定されている。
44. Marx[3] I, S.494
45. Marx[3] I, S.501
46. 大村 [5]
47. Marx[3] I, S.336
48. Marx[3] I, S.508
49. Marx[3] I, S.510
50. 詳しくは小幡 [6] をみられたい。
51. Marx[3] I, S.365-366
52. 阪口 [10]
53. 詳しくは小幡 [7] を参照されたい。
54. Marx[3] I, S.196
55. Marx[3] II, S.125
56. Marx[3] I, S.380

57. [3] I, S.389. 本稿 9 参照のこと

58. 宇野弘蔵は独自の発展段階論を提示し、そのなかで重商主義段階における支配的資本は商人資本であるという見解を提示した。これはマニファクチュアが支配的であったとする、大塚久夫との論争になったのであるが、この点をいま問題にするつもりはない。ただこのような論争のなかで、宇野の『経済原論』における「資本家の生産方法」の考察が、マニファクチュアに関して特殊な偏りを示している点は注意しておきたい。宇野のマニファクチュアに対する見解については、宇野 [4] を参照されたい。

59. D.K.,I,S.370

60. Marx[3] I, S.495

61. 小幡 [6] をみられたい。

62. Marx[3] I, S.497

63. Marx[3] I, S.496

64. 試論的なものであるが小幡 [9] をみられたい。